

国登録有形文化財に登録された 旧山田家住宅の建造物

今回、国の登録有形文化財に登録された旧山田家住宅の7件の建造物。

建築年代がさまざまな旧山田家住宅の建造物からは、江戸時代から明治にかけて「北信濃の豪農」として知られた山田家の人々が歩んできた歴史の足跡を見て取ることができます。

それぞれの時代に合った特徴を持つ一つひとつの建造物には、山田家と北信濃の関わりが深く刻み込まれており、私たちにとって地域の歴史を知ることができ貴重な財産となっています。



▲登録プレート

登録番号第20-0504号

新座敷

建築年代
昭和28(1953)年

▲◀新座敷の外観(南面)と、八畳間



応接間として建築されたと思われる新座敷は、北面から4畳の取次を通して入室し、東に床の間と脇床、南に縁側がつけられています。外観は木造平屋入母屋造り起り屋根、内部は真壁造り京壁仕上げで、柱や建具には、施主が約10年かけて収集したサクラ、ケヤキ、カエデ、イチイ、イチヨウなどの銘木が使用されています。

登録番号第20-0503号

奥座敷

建築年代 明治中期 ※昭和26(1951)年移築

奥座敷は客人をもてなす場として使用された建物です。

建物の外観は、木造平屋建、寄棟造り、内部は真壁造り京壁仕上げで、南北に縁側が回されています。

座敷全体の造りは数寄屋風であり、良質の杉材を多く使用した座敷と床の間は、茶を嗜んだ施主の考えがよく現されています。

▼◀奥座敷の外観(南面)と、八畳床の間



登録番号第20-0505号

質蔵及び文庫蔵

建築年代 弘化5(1848)年



◀▲質蔵の外観(北面)と、文庫蔵南面扉周り

質蔵および文庫蔵は一連の北面土蔵群として、旧山田家住宅の代表的な景観をつくっています。また、水路に沿った石積みと白壁、下見板が往時をしのぶ美しい景観を残しています。

質蔵、文庫蔵ともに、南面扉は黒漆喰塗りの本格的な防火扉であり、裏白戸、ケヤキの板戸、網戸が取り付けられています。質蔵の内壁は縦板張り、2階小屋組は中引きを入れた造りです。

1階床下は束立てで、土間は叩き仕上げで床下中央部に水抜き穴があることから、特に湿気への対策が考慮された建物です。



▲◀六間蔵および二間蔵の外観（東面）と、六間蔵の内部

登録番号第20-0508号
 建築年代 明治13（1880）年
六間蔵及び二間蔵

六間蔵および二間蔵は、外観が隅蔵と塀でつながれ、酒売場と一連で棧瓦葺きの屋根、石積みと白壁、下見板の構成で、美しい景観をつくっています。内部の床が下屋の土間よりも90センチ高く張られているのは、水害を考慮して作られている証拠です。内側の下屋からこの蔵を眺める景観も見どころです。

登録番号第20-0506号

裏門・台所味噌蔵及び事務所

建築年代 明治13（1880）年

質蔵や文庫蔵に連なり、北面の土蔵群を構成しています。裏門は、旧飯山城門で明治期に移築されたと伝わります。

裏門・台所味噌蔵および事務所は、石積みと白壁、下見板が美しい景観をつくっています。

事務所は10畳の和室と洋室の2室で構成され、和室は休憩室として、洋室は土間もあり帳場として使用されていました。



◀▲裏門の外観（南面）と、裏門・台所味噌蔵および事務所の外観（北面）

登録番号第20-0509号

酒売場

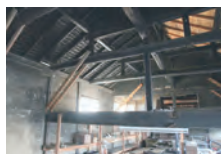
建築年代 明治中期

明治41年の絵図から酒売場として使用されていたことが分かり、大正元年から昭和10年までは、山田家は蚕に注力したため、蚕室として使われていました。

外観西面は六間蔵・二間蔵の土蔵造に連なり、真壁造り漆喰塗り下見板張りの姿は独特で、他の土蔵群の景観とは異なっています。



▲▶酒売場の外観（西面）と内部



▲▶隅蔵の外観（西面と南面）



隅蔵

登録番号第20-0507号
 建築年代 幕末

北面は国道403号線、西面は直行する市道沿いに面して建つ文字通り隅蔵です。南面入口に土庇がつけられ、利便性が図られています。外観は北面土蔵群と同様、石積みと白壁、下見板が連なり美しい景観をつくっています。内部の床は板張りで、小屋組は中引きを入れた形です。屋根は置小屋であり、古くからの土蔵造りの形式をよく残しています。この建物は、明治3年の中野騒動の際、一部が焼け焦げましたが、現在でもその部材の一部がそのまま残って使用されています。